

舌に発生した脂肪腫の1例

(地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院 歯科口腔外科)

大西 ゆりあ 白井 陽子 西村 毅

要 旨

症例は76歳女性。舌下部の腫瘍を主訴に当科を受診した。左側舌下部に弾性軟で境界明瞭な腫瘍を認め、MRI所見にて左舌下部に18 mm × 18 mm × 24 mm大の腫瘍性病変を認めた。全身麻酔下にて腫瘍摘出術を施行した。病理組織学的所見にて脂肪腫の診断を得た。術後1年経過するが舌の運動、味覚、知覚障害などは認めていない。口腔領域での脂肪腫の発生は比較的まれである。

(京市病紀 2018 ; 38(2) : 55-57)

Key words : 脂肪腫, 舌

はじめに

脂肪腫は脂肪組織に由来する非上皮性腫瘍である。1709年Littreによってはじめて報告されたもので、脂肪組織が存在する部位ではいかなるところでも発生するが、口腔領域での発生は比較的まれである。今回われわれは、脂肪腫の1例を経験したので報告する。

症例

【患者】76歳，女性。

【主訴】舌下部腫瘍。

【既往歴】高脂血症。

【現病歴】X年1月に左側舌下部の腫瘍を自覚し近歯科受診，2月当科を紹介受診した。

【現症】

全身所見：特記事項なし。

口腔内所見：左側舌下部に20 mm大，弾性軟，粘膜色，表面平滑で境界明瞭な腫瘍が認められた。腫瘍は可動性で圧痛はなく，舌の運動，味覚，知覚障害は認めなかった

(図1)。

【画像所見】MRI所見；左舌下部に18 mm × 18 mm × 24 mm大の境界明瞭な腫瘍性病変を認めた。T1およびT2強調画像にて著名な高信号を呈し，脂肪抑制T1強調画像にて低信号を示した(図2)。

【臨床診断】舌良性腫瘍。

【処置および経過】X年7月，全身麻酔下にて腫瘍摘出術を施行した。舌下部粘膜に切開を加えると，黄色の腫瘍が露出した。表層より鈍的に剥離すると被膜を有した弾性軟の腫瘍を認め，境界明瞭で周囲組織からの剥離は容易であった(図3)。術後の治癒経過は良好で，舌の運動，味覚，知覚障害などは認めていない。

【切除標本所見】腫瘍は18 mm × 18 mm × 24 mm大の類円形で被膜を有し，剖面で壊死，出血，石灰化などの所見は認められなかった(図4)。



図1 初診時口腔内写真
舌下部に腫瘍が認められた。

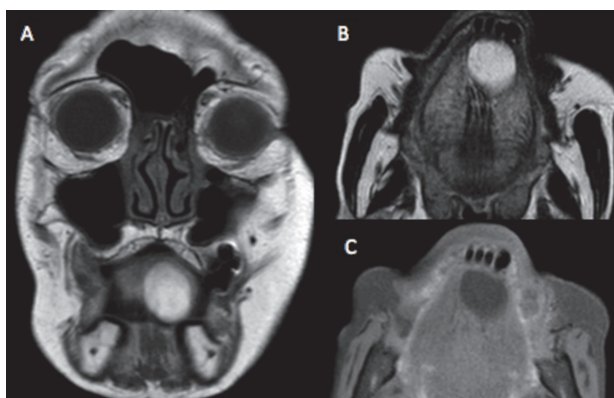


図2 MRI画像
T1強調像(前額断および水平断)にて境界明瞭の高信号を示し(A, B), 脂肪抑制併用T2強調像(水平断)で低信号を示す腫瘍を認めた(C)。

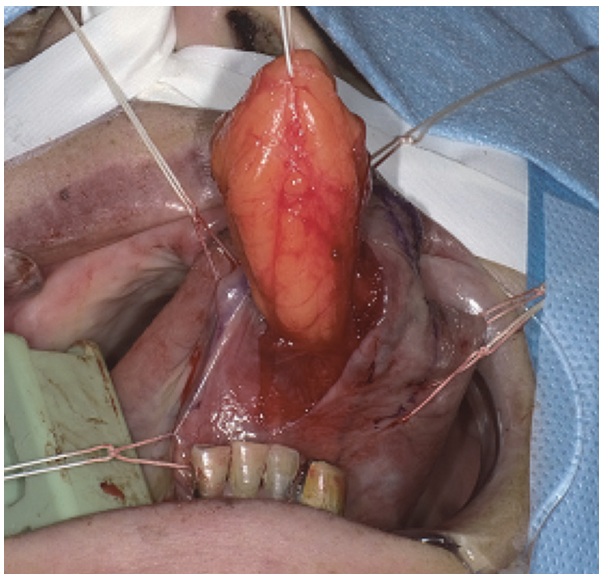


図3 術中写真
舌下部粘膜から鈍的に剥離すると腫瘤を認めた。



図4 切除標本
腫瘤は黄色，弾性軟であった。

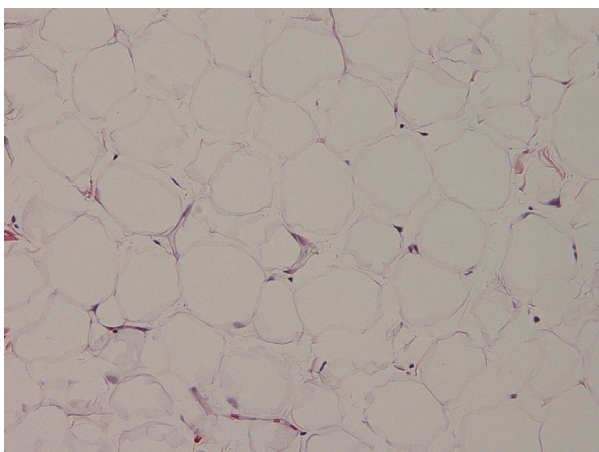


図5 病理組織学的所見

【病理組織学的所見】成熟した脂肪細胞の増殖よりなる腫瘍で，大小不同はみられるが，異型細胞は認められなかった（図5）。

【病理組織学的診断】脂肪腫。

考 察

脂肪腫は良性軟部組織腫瘍のなかで最も多いものの1つである。脂肪組織由来であるため，全身に発生する非上皮性の良性腫瘍であるが，口腔・顎顔面領域での発生頻度は全脂肪腫の0.6～2.2%とまれである¹⁾。

脂肪腫の組織型として，成熟した脂肪細胞のみであるものを単純性脂肪腫とし，成熟した脂肪細胞の増殖の中に他の成分が混在している場合には，その成分により線維性，脈管性，筋肉性，良性間葉細胞性，骨髄性脂肪腫と分類される²⁾。

脂肪腫の発生要因は，先天性内因，遺伝的素因，内分泌失調，持続性刺激などで，基礎疾患に脂質異常症，アルコール依存症，肝疾患，糖尿病，高尿酸血症の患者に合併するという報告があるが，発生機序の多くは不明である³⁾。

口腔内に発生する脂肪腫の発生部位として，頬粘膜が42%，舌が18%，下唇が12%，歯肉が12%，口底が6%で病理組織学的には単純性脂肪腫が75%，線維性脂肪腫が20%，筋肉内脂肪腫が0.6%と報告されている⁴⁾。

症状は腫瘍の発育が緩慢であり自発痛，圧痛を欠き，舌の運動，感覚障害も認められないため自覚症状のない腫瘍として気が付くことが多い。本症例でも，日常生活に支障が出る程の自覚症状が認められなかったため，当初初診時から半年程経過観察し手術へと至った。

診断は特徴的な臨床所見を示すことから視診，触診が重要である。画像所見ではMRIが有用でT1T2強調画像ともに高信号を示す。

病理組織学的には，成熟した大小不同の脂肪細胞の増殖からなる所見が特徴的である。

鑑別疾患として血管腫，神経鞘腫，ガマ腫，リンパ管腫，高分化脂肪肉腫などがある^{5),6)}。

臨床所見やMRI所見のみでは特に高分化脂肪肉腫との鑑別が困難であるため，病理組織学的診断が重要となる。高分化脂肪肉腫は，脂肪肉腫の中ではよく見られる低悪性度の腫瘍である。Enzingerらは脂肪腫と高分化脂肪肉腫との鑑別は非常に重要であり，十分量の組織から病理組織学的診断を要すると述べている⁷⁾。

また，身体のあらゆる部位に発生する単発性孤立性病変である脂肪腫に対して⁸⁾，脂肪腫症は正常組織内におけるびまん性の脂肪組織増生を特徴とした腫瘍性の全身性多発性病変である。周囲組織との境界が不明瞭であること，被膜を有しないことから脂肪腫とは区別されている⁹⁾。本症例では，他の部位に脂肪腫が認められなかったため否定された。

治療は外科療法が選択されることが一般的である。予

後は良好で再発例は少ない。本症例でも術後、機能的な問題はなく12ヶ月以上経過しているが再発は認めていない。

結 語

今回、舌に発生した脂肪腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

引用文献

- 1) Hatziotis, J. C: Lipoma of the oral cavity. *Oral Surg Oral Med Oral Pathol* 1971; 31(4): 511-524.
- 2) Damm, D. D, Bouquot, J. E, et al: *Oral and Maxillofacial Pathology*, 3rd ed, Saunders Co, Philadelphia 2008; 523-524.
- 3) 小林大輔, 木田亮紀, 他: 舌に発生した脂肪腫例. *耳鼻臨床* 2002; 95(4): 365-370.
- 4) 野地淳一, 清水 武, 他: 口腔顎顔面領域に発生した脂肪腫の臨床的検討. *新潟歯会誌* 2011; 41(2): 91-97.
- 5) 平松正浩, 高橋昇司, 他: 脂肪腫. *皮膚病診療* 1996; 18(3): 215-218.
- 6) 田鍋志保, 長谷川誠, 他: 舌片側を占める筋肉内脂肪腫症例. *口腔・咽頭科* 2006; 18(3): 453-457.
- 7) Weiss SW, Goldblum JR: *Enzinger and Weiss's Soft tissue tumors*. 5th ed, Mosby, Philadelphia. 2008; 429-516.
- 8) 三宅哲, 武田祥人, 他: 両側舌縁部に生じた脂肪腫症の1例. *日口粘膜誌* 2008; 14(1): 9-13.
- 9) 塚本光, 浜田智弘, 他: 71歳男性の両側舌縁部に発生した脂肪腫の1例. *日口誌* 2008; 21(1): 107-111.

Abstract

A Case of Lipoma of the Tongue

Yuria Onishi, Yoko Shirai and Tsuyoshi Nishimura

Department of Dentistry and Oral Surgery, Kyoto City Hospital

A 76-year-old woman was admitted to our department with a complaint of a mass on the tongue. An elastic soft border tumor was found on the left lower tongue surface. Magnetic resonance imaging findings revealed a 18 mm×18 mm×24 mm tumorous lesion in the lower left tongue. Tumorectomy was performed under general anesthesia. Diagnosis of lipoma was obtained by histopathological findings. One year after surgery, disorders of tongue movement, taste, and perceptual dysfunction have not been recognized. Lipomas in the oral cavity are rare.

(J Kyoto City Hosp 2018; 38(2):55-57)

Key words: Lipoma, Tongue